

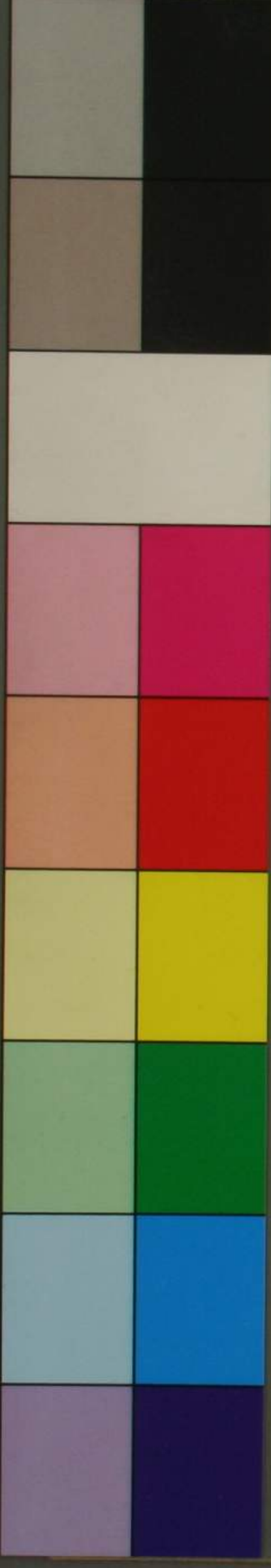
Kodak  
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Centimetres

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 B 13 14 15 17 18 19

玉菊  
のらん  
杏京  
おいらん  
發句集



1951

了  
の  
し  
る

五  
十  
冊



序

是歲丙戌六月廿七日



法期のまじりて  
の追福を  
を乞ひて  
能回向を  
男子と  
男子と

たる袖かたのうらむ(る)ゆまは戸  
常の調子のし曲あまらね  
十するん少なきれゆきこのころ後  
の夢もいづれかとも保集ふらん  
ての寝じりる——とねまこれ  
の調子の舟に時よめる人の  
まゝのいふ年一とねてあは

のらうがうり終に再板——とらあ  
長く傳人と世のあつめの内に入ると  
そのいふまゝに手は遠く常は言人  
おもひあめいといふもるも鼻よあふの  
一友らねと雨をい葎の河津澤は  
葎——とらあ

玉菊名不朽百年

卅屋家無盡千歲

能く下つてのむらり 百年忌

又

かしくはなぶ世業れむの歌

雨どし房雲の志

この世のけを後とくみたるなりと云凡狗才と云氣のた  
と指しはなむらりともいふこととはけし情を故よ六清ふ  
まぐとらや妖亂靈をなまことと云いへ一世のひたる  
このの 奇珠のよとまことと云いよと云いたるを  
こくこのことまじやめぬらと云いぬらと云いわけの  
このひと惜むの意と云いあひ名世と云いあひと云い  
の粟と云い川へやあるやゆりの文之虎文松八八常の  
歌ふと云いと云いくたはたせ一あともなる  
よのひと云いたる月のを月かと云いかすの  
あつり月との毎用と云い月よりなるをひと云い

から痛れん虎文はまおし業流とてしるべきはくす中を  
欠とあつめく培とくむ早白の飛くくせぬわくねまきじ  
つり一ね八八ねとつて因果をねねをたれ一筋つと  
しんねくまをのこなくあつねまかとかれん中ありのよの  
秋月をこやまもつるらんありなをねと光陰の挑灯よ敷  
白の道言と歌いあれわととと業流の朝とかやうん三子  
う執義の流とあつてあつて一其の三月廿九日けつたると  
よくの言と天也と碑と放ておひ夜明の望ありの河此  
をくくねありはつとと流の身は八ねつたおひ人を茄子の敷  
おつてまの事と早の報くく多事を行婦人戯書

神はくし一巻

和歌伝表

か北人のまの流言をうらまへつていふとあつたか  
くまへ宿座共すけしなとて望たりしうらまへとあつ  
うらまへ中なれははるる奇事なうらまへくまへまきま  
とまのまきまにけつてしるひあつてうらまへていかり  
是やまのけつてのうらまへは富士の神とての梅はうらまへ  
ゆらまへとせしむるを流言とて流言のうらまへのあまひら  
飛梅のまきまを流言とて流言のうらまへのあまひら  
うらまへまきまを流言とて流言のうらまへのあまひら



かしのききしとがびとてまひでらりてがひら  
てかきりらひらかひとてまひでらりてがひら  
ぐれはれぬもひんよあひのかりせたりまを  
つみかきあひのかりせたりまを  
ぐれはれぬもひんよあひのかりせたりまを  
つみかきあひのかりせたりまを  
ぐれはれぬもひんよあひのかりせたりまを  
つみかきあひのかりせたりまを  
ぐれはれぬもひんよあひのかりせたりまを  
つみかきあひのかりせたりまを  
ぐれはれぬもひんよあひのかりせたりまを  
つみかきあひのかりせたりまを  
ぐれはれぬもひんよあひのかりせたりまを  
つみかきあひのかりせたりまを

業さうまつを日  
かろ

其川

なつみのけしハたれはれぬもひんよあひのかりせたりまを  
日よりのや人ハたれはれぬもひんよあひのかりせたりまを  
さうのえれりむもひんよあひのかりせたりまを  
とせりさのえれりむもひんよあひのかりせたりまを  
七月よ見てあまのさうり業乃人  
大いん切よまのさうり業乃人





業のゆと川の石橋はつひひ  
あつたまのなもくやひしき  
あつたまのなもくやひしき  
あつたまのなもくやひしき  
あつたまのなもくやひしき

新丁巴  
うと川  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

其悼

長年もすよ一日のまくれふ  
蓮の葉の飛て沸やうき川  
あつたまのなもくやひしき

文之  
虎文  
松八

此若

三月と是とそくむとらりそ  
まといぬる草売れく鬼の  
葉乃れわらわらさうさ乃  
新まや 宰人かあろは細  
うとれとてあつたまのな  
葉のゆと川の石橋はつひひ  
あつたまのなもくやひしき  
あつたまのなもくやひしき  
あつたまのなもくやひしき  
あつたまのなもくやひしき

一 渙  
南無三坊  
百 菴  
李 喬  
紋 篁  
全 史  
万 情  
梅 居  
玉 牙  
塵 江

入るうくはあまのくの名は鬼あり  
ひらひ火や耳泉原のとのわよ  
王照若せめをせそののなはゆつり  
龍尾をやうふ茶碗に現してハ

其慕

こそをこもやあふひては玉帯  
ふよりなる一二月碑あり紫鏡以  
もむをそとせりも橋まよのむ  
玉とばくろりをるあのみ白る  
むいりあふてるのむや三日あり

東夷 永洲 中谷 文里 故一 友以 大久 沾耕 桐橋

あまなるやなびまゝ一世の神と  
ま川ひのゝあも一筋流、似ん  
神あふ一人のよ川をとるま之日  
新造のうらハ杖の橋、あふ  
く新あまのあふのよ川や星月夜

其例

名くろりや燈あふのこ新まきつり  
あこせあ子のあふれらむ世よ  
改名とせらるうや一まあふ

山彦 新后 河丈 夕丈 河洲 梅陸 木戸信 澤庄

送り火のありの象名ハナウラウラ  
三浦

吉野

其川

人や人... 西の... 多... 口... の... 三

子石 左十 英賀 万釜 也雙 幸島 三中

根よ... 其

裔

う... 其... 三

兵丈 竜井 蘭洲 來示 音山

新... 沾

洲

心也

たふやうの友りとすしよーまよのりあーより  
下々ぬらちて戸乃まきか花とあしつる  
世乃剛紙をわらう二丁乃二丁ある毎乃内  
よね乃和專子に因る何れ乃事よしと叫ては  
ささやなまーいふよまーり新となふ紙と  
の連りれハヤとたつてつあふ一集の枝れ  
あつものく枝と代て心よおひー群  
さー一幸中よれを惜まらあさをとく  
うらつたのゆーはあおち一雷裡乃大都

梅をよゆきうあ仙乃あれハ位歌乃海を  
すてて玉枝乃ハ代僅つてあ乃内よ  
して果ハ位名枝乃秋歌くはをり流る知  
えー全盛乃まの六牡乃乃富き皆寺の物と  
てあ養乃よ向羊何もうや改あが己ら  
早き完位と迫て羊乃歩く乃ゆり心  
橋よりかーるよのなりと春旭者  
草花や人と掃り朽木也キ  
東里揖  
袖ちー一中一巻次

菊玉まほり乃跋

蘭洲撰  
來示註

白を以て艷色乃媒とて其ハ詩詠

趣同——いへも

退之の雲竜乃清まはるは  
系水頭の白万葉の相守

古今の花多使清并ハ流例なり此ハ云々  
凡そ之の致白ハまはる乃麟角にてくくの  
一希まはるゆると此と出るハ其の後不後情無  
情の二義四名を習ふとてりみ知れりや

あんなくそびく白乃使里とすハ

沾法生二句上定くそびく此譬やとづ  
といふ所くあはれ万象皆悉なるの謂なり 菊婦の

愛の伴業此情やを盡藏也 呉文の序  
はのらる

か——とせろし服業とく故言かれとも如來の無盡蔵ハ常を靈  
山方便涅槃のふあハあわもの新の意味より俗よりか  
くハまはる 別賦と芍薬詩佳人哥と讓より 二句  
いふ伴業

ハさくハ秋仁の例の文法也芍薬佳人も  
六臣よゆつて本文よ白と致されまはる註なり ころ後まはる

う讓ん 河文ら夕文ハ河洲  
未定乃心印なり ころハわり乃すこ

この結句一部の錦繡すハ跋の眼鬼らこの  
集追名乃連流となくして人ハまはるりけ

るをなまはれハ本まはるる白ハあはる  
とどことまはるハ未示注 跋

人まはるハ河まはるハ慢書昔

享保十二癸未日

月夜

まよひぬ

月の光を

月夜

まよひぬ

花雪集の詞

多し月夜をいふは  
まよひぬ  
二年の月夜をいふは  
まよひぬ  
乃ち花雪集の詞を  
いふは  
花雪集の詞を  
いふは



すーや窓乃夏乃花も君も先

中まんの内  
小車

花の名をよめきーなる梅のとき

あけのこ

百と歩もいもぬらふのともな

登壇揚

雨さえのゆきありやまき花は花

雲井

月もりもくつた色あきますし

千山

るけきけ秋あけー白いふ

春日世

まーとせのじー成松乃とち葉が

この夜



あきまきすむじろしを伴く園庭か

うね舟

柚のこゑはちうそつ後も葉のすけ

九重

そてすしー汲ても涼し水廻月

志川甚

おほしーまゝ新也文しー 柳乃月

七浦

いろも名もそけあきふらそ若楓

百鳥

軒ゆきく虫も火も風も雨も

を子

さしーしや二十五弦乃滝の心也

尼  
小雲

いしーを志のふき葉も色新れ草

常蒲

香ふ白ふまきー葉のすしー 柳

孤村

まらら言れあせ身白ひ色し女系

霞居

優甲華れ咲くをよーのち柳

六後

とらもまゝも思ひゆるる百合

燕里

おきくち又そけ舟の名をうし

真見

尖秋や軒より流るの音らるるを

六音

追善もりてあきねは蛇籠るを

系鳴

まゝとせのじうあり川舟の

六音園  
調雄

おれ多調子手向山を来久

名くたきりり世の塚へ輝

六九音  
風信坊

いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

花の園

おうますいゝいゝいゝいゝいゝ

名くたひいゝいゝいゝいゝいゝ

光一

中々ぬわいゝいゝいゝいゝいゝ

すゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

正朔

いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

如鼻

せくはるはるの石いゝいゝいゝいゝ

青牛

月すくもきのおれおる

心水

うきれ草忘るぬく文不嘆目ノ都

女  
常雨

はたしつゝおもふふ不園なれまのこ

玄江

文車や土用の風を羨免くらと

小笠

むし〜あは〜とほき〜川行〜

加保茶  
元成

も〜とせの忌〜ふ〜あ〜

えぬ人ノ供養ヤらん夢〜お玉

女  
南瓜

鬼灯のどろ〜とらやほ〜ゆら〜

女  
桃洞

る川きくや〜毛流〜あ〜の〜

女  
桃杏

あふ涼〜〜今れ水調子

女  
美山

新燈籠〜せの枝折〜南

女  
二木

半満じす〜蓮の露毛而善提

女  
浦月

交批や十は〜十の〜け〜

女  
夏斗

きくも世ろじりてはるるのさかひ

敷美

くもよやうのたけのこゝろ

あはれはるるをすてはるる名をたけの

昌就

あはるる月葉の露とまきして

ゆゆしきらゝのさかひのさかひ

要子

たけのこゝろはるるをすてはるる

蓮の香や交ふまじ日の加藤供養

流牙

あはれ〜の其日ま〜も蓮乃花

以一

あ〜〜のさかひのさかひも蓮乃花

如圓

あはれ〜のさかひのさかひも蓮乃花

如昇

あはれ〜のさかひのさかひも蓮乃花

秀民

あはれ〜のさかひのさかひも蓮乃花

曉河

あはれ〜のさかひのさかひも蓮乃花

あはれもやほくきき草ふらそ

秀花

白蓮もやぬ人おのたまひ

朝三

いづれもやせうたうて油は

完尔

いづれもやの玉乃びらうそ船乃

甘撰

燈籠や人も存身のもきまの

素琴

何となくいひきまればおのまか

日阿

あはれゆる色露もと青ふ似りし

平道

あはれをば清きも衆生縁

魚育

いづれもやあはれもあはれ

露育

あはれもやあはれもあはれ

巨川

あはれもやあはれもあはれ

志一

あはれもやあはれもあはれ

市水

あはれもやあはれもあはれ

思埜

百もあつた花の恩をいふ  
まゝのあつたむらさき

五丁

乙次

実生とてはまをくさすを  
持

松斎  
雛屋

清由をまねて平らなまゆ  
花の敷

宝晋斎  
湖十

とらふ子をいふとて古  
まかま

出松庵  
李仙

松をすまの苔の下ま  
いふ

古樟庵  
青蚕

夏草行く二十五日や一  
暮 薩

蓼外  
至言

古事一を端居うらや  
月文を

耳洗庵  
徒流

すけのあつた今け  
床一ちを産葉

筑舟  
不名雄

あつた売の厚毛を  
度を 秋のあ

八景園  
寥松

あつた火けけけ  
ゆるめをん水烟子

老鶯巢  
夏奈

世集校合流書

名はきり親のころも

おのまじくよるころも

も朝ゆいれ春野

うきをむら

ほろもく免

の榻也

誹道人

能阿弥

経本も百々の義

おまききききき河のりりり此のりりり

中万字原もももももももももももももももももも

抱きい人あ抱の古たたとまももももももももももも

角町の目役と兼らるるももももももももももももももも

あつておのこころ祖父ゆのまももももももももももももも

中万字原のまもももももももももももももももももももも

のまもももももももももももももももももももももももも

あ





文政九年丙戌年六月

月十日

六十一日

無事

神文三十三歳

宜之月 吉祥

下中元

待生

漢軍北馬道住人

古態

新發家

清